

いられたものが最適ではあるが、北里蘭の蠟管蓄音機は歴史的価値があるため、部品を取り替えるなどの修復ができない。従って、今後、北里蠟管の再生を行うためには、北里蓄音機と同型の蓄音機を購入し、現在、その蓄音機がどの程度の精度を保っているかの実験を行う。次に、文献により一九〇〇年当時の音声の精度を調査する。現在の部品を用いて当時の音声になるよう修復し、修復後の再生品位を検証することが必要だと考える。来年度の真宗総合研究所、一般研究に申請し、今後、この手順で研究を進める予定である。

正統バラモン思想とは何か

山本和彦

インドには古代から様々な思想があり、多くの宗教的哲学的な学派がある。現在文献として残っている最も古いものは、紀元前二二〇〇頃までに成立したヴェーダ(veda)の文献である。そして、紀元前七世紀頃に成立した『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』(Bṛhadaraṇyakopaniṣad)、『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』(Chāndogyaopaniṣad)など初期ウパニシャッド(ūpaniṣad「念想する」)文献がそれに続く。そして沙門(sramana「修行に努める者」と呼ばれる自由思想家たちが活躍し、仏教(Buddha)、ジャイナ教(Jaina)、唯物論者(ローカーヤタ Lokāyata, or チャールヴァーカ Cārvāka

〈キーワード〉北里蘭、蠟管蓄音機、一九二〇年代

派)などが興起した。紀元前後から四―五世紀頃までに、ヴェーダーンタ (Vedānta) 学派、ミーマーンサー (Mīmāṃsā) 学派、サーンキヤ (Sāṃkhya) 学派、ヨーガ (Yoga) 学派、ニヤーヤ (Nyāya) 学派、ヴァイシエーシカ (Vaiśeṣika) 学派というインド六派哲学 (śāstra) の基礎が固まり、『マハーバータ』 (Mahābhārata)、『ラーマヤナ』 (Rāmāyaṇa) という二大叙事詩、諸々のプラーナ (pūrāṇa 古伝書) 文献も成立した。ヴェーダ、ウパニシャッドという天啓聖典 (śruti) を中心とした紀元前五世紀以前の宗教がバラモン教 (Brahmanism)、それ以降の叙事詩、プラーナ、諸哲学など伝承聖典 (smṛti) を中心とする宗教がヒンドゥー教 (Hinduism) と呼ばれている。さらに詳しく言えば、バラモン思想 (Brahmanism) とは、ブラーフマナ (brahmana 婆羅門) 階級の僧侶を中心にヴェーダ聖典を權威とし、祭式を重視する古代インドの民族宗教の思想のことであり、有論者アースティカ (āstika) の思想である。仏教やジャイナ教は沙門の宗教であり、バラモン教には属さないし、その思想もバラモン思想ではないし、

無論者ナースティカ (nāstika) の思想である。アースティカは、死後の靈魂、主宰神 (īśvara)、ヴェーダの權威を認め、ナースティカは、それらを認めない。自由思想家は祭式中心のヴェーダ (宗教的知識) から自由になった思想を瞑想、苦行、神秘的直観などにより持ったので自由思想家と呼ばれるのである。

これらのインド思想は、ヴェーダ思想と反ヴェーダ思想に大別できる。ヴェーダの權威を認める思想が、インドでの正統な思想であり、バラモン思想である。ヴェーダの權威を認めない思想は、非正統であり、反バラモン思想である。仏教やジャイナ教などはヴェーダの權威を認めないので、インド非正統思想、つまり反バラモン思想である。インド六派哲学はすべてヴェーダの權威を認めているので、インド正統思想、つまりバラモン思想である。しかし、どの程度ヴェーダに対して權威を認めているかについては学派によって温度差がある。ヴェーダーンタ学派とミーマーンサー学派は、絶対的に權威を認める。無神論のサーンキヤ学派や自然哲学のヴァイシエーシカ学派はヴェーダ聖典の考察に意欲はなく、そ

れほど権威を認めていたわけでもない。それぞれの姉妹学派であるヨーガ学派、ニヤーヤ学派も同様である。

このように考えてみると、正統バラモン思想、もしくはバラモン思想正統派とは、ヴェーダの権威を絶対的に認める思想、もしくは学派であり、ヴェーダーンタ学派とミーマンサー学派にその呼称がふさわしく、非正統バラモン思想、もしくはバラモン思想非正統派とは、ヴェーダの権威を認めるが絶対的とまでは言えない思想、もしくは学派の呼称にふさわしいのではないだろうか。そして、仏教やジャイナ教は、インド非正統思想、反バラモン思想である。

しかし、日本の学界においてはこのような呼び方はなされておらず、インド正統思想のことを「正統バラモン思想」、インド非正統思想のことを「非正統バラモン思想」と表現されてきた。この「非正統バラモン思想」ということは、非・正統バラモン思想（正統バラモン思想でない）であって、非正統・バラモン思想（正統でないバラモン思想）ではない。この従来の考えでは、仏教が「非正統バラモン思想」になってしまうのであるが、こ

の表現は紛らわしい。つまり、仏教を「非正統」なバラモン思想であるという解釈も許すからである。したがって、先にも述べた通り、正統バラモン思想とは、ヴェーダの権威を絶対的に認める思想、バラモン思想正統派の思想であり、非正統バラモン思想とは、ヴェーダの権威を絶対的とは言えないまでも一応は認める思想、バラモン思想非正統派の思想と考える方が誤解がなくなる。そこで、認識手段の優越性という観点から、バラモン思想を正統派と非正統派に区別すればどうであろうか、と提案したい。

インド思想において、すべての学派から認められている認識手段（*pramana*）は、知覚である。知覚は他の認識手段に対して優越性（*paratva, jyeshthata*）を持っている。知覚の優越性は、インド思想一般においてほぼ認められている。ニヤーヤ（*Nyaya*）学派のヴァーツヤヤナ（*Vatsyayana, c. 400-450*）は、認識結果は知覚によるものが最も優れていると言う。聖言によって認識された知識（認識結果）を推理し、さらに知覚することは知覚とする意欲があれば可能である。しかし、知覚によって

対象が認識されれば、知ろうとする意欲 (jijāsa) がなくなってしまうのでさらに認識しようとするのではない。(Ed. CSS, NBh 92.9-93.1)

しかし、ヴェーダの権威を最優先に認めるヴェーダーンタ学派は、天啓聖典 (śruti) の認識手段である聖言の優越性を主張する。ヴェーダーンタ学派と姉妹学派であるミーマンサー学派も聖言の優越性を主張するはずである。アドヴァイタ・ヴェーダーンタ (Advaita Vedānta) 学派の立場で書かれたマンダナ・ミシユラ (Māṇḍana Mīśra, c. 660-720) の『ブラフマ・シッデイ』 (Brahmasiddhi) のなかでの対論者は、聖言に対する知覚の優越性を次のように言う。知覚 (pratyakṣa) と聖典 (śāstra) が矛盾する場合、聖典の方が弱い。なぜなら聖典は知覚に依存しているからである。(Ed. Kuppaswami, BSi. 39.10) したがって、聖言よりも知覚が優れていることになる。この対論者の考えは、ニヤーヤ学派の「あらゆる認識手段は知覚に基づく」(Ny 91.15) という考えと共通である。これに対して、マンダナは聖言の優越性を主張する。知覚の後で聖言知は成立するが、時間的に

後のもの(聖言)が前のもの(知覚)より強い。(BSi. 40.3-4) たとは、最初の「象」(hasiṇ) という誤知は、後に「森の木」(vanaspath) という正しい認識によって否定される。(BSi. 41.3-10) 知覚は人間の認識であり誤知の可能性があるが、聖言は天啓であり誤知の可能性はない。(BSi. 40.7-9)

インド思想においては、天啓聖典(ヴェーダとウパニシャッド)の権威を絶対的なものと考え、その認識手段である聖言が最も優れた認識手段であると考ええる学派がある。これはバラモン思想正統派であり、アドヴァイタ・ヴェーダーンタ学派などがそうである。これに対して、ヴェーダの権威を絶対的とはまではないが、一応認める学派があり、彼らは認識論上の観点から、知覚を最も優れた認識手段と考える。これはバラモン思想非正統派であり、ニヤーヤ学派、ヴァイシエーシカ学派、ヨーガ学派、サーンキヤ学派がそうである。さらに、ヴェーダ、ウパニシャッドの権威をまったく認めない学派もあり、これは反バラモン思想であり、インド思想のなかでは非正統派思想であり、仏教、ジャイナ教、唯物

論者などがそうである。

元初の法会について

——石刻史料を手がかりに——

桂 華 淳 祥

元朝では為政者によって仏寺の造営・法会の開催・名利への行幸などの仏事が盛んに行われたことが『元史』などの文献史料から知られる。本報告では、これらの活動のなかの法会について、生の史料である石刻史料を手がかりにして開催の事実を跡付け、その意味を考えてみたい。

元代の仏教関係石刻史料（僧伝・寺記）を通覧すると、法会に関する記事、特に資戒会と称する法会の記事が散見される。これについて『元史』には

至元十三年（一二七六）二月辛酉、車駕幸上都、設資戒大會于順德府開元寺、

（同年）九月辛酉、……設資戒會于京師、

〈キーワード〉知覚、聖言、ヴェーダーンタ